



2009年5月6日放送

## 印象に残る症例 ②

横浜朱雀漢方医学センター センター長 熊谷 由紀絵

「冷え症」や「更年期障害」といった症状が、あたかも女性の専売特許であるかのように思われていた時代に、最も辛い思いをしていたのは、実はそうした症状を抱えた男性方ではないでしょうか。「男性更年期」という言葉も今でこそ広く知られるようになりましたが、それでも十分にその症状が理解されているとは言えません。ましてや「冷え症」だなんて、ご自分から名乗りを上げてくださる方は、なかなかいらっしゃらないものです。

さて今回は、漢方薬を用いた男性の冷え症治療のお話をしましょう。外来を受診して下さる方がまだ圧倒的に少ない現状では、一つひとつがとても印象に残る症例です。まず何といっても特徴的なのは、男性の場合、冷えの自覚に乏しい方がかなりいらっしゃるということです。ご家族から「お父さんはいつも手が冷たいね」と言われたり、マッサージなどを受けた際に「ずいぶん足が冷えてますよ。血行が良くないんじゃないかしら」と指摘されて、初めてそのことに気づかれるケースが、とくに中年までの男性に多いようです。さらに不思議なことに、体格と冷え症状の相関が、女性ほどはっきりしないように思われます。多くの患者さんたちを拝見していると、女性はやはり、きゃしゃな体格の方ほど冷えがきつい傾向がみられます。実際に「体重が増えたら、冷え症がずいぶん良くなったみたい」とおっしゃる方もいるくらいです。そのためか、女性の冷え症の治療薬としてよ

く知られている漢方薬は、圧倒的に虚証の方向きのものが多いのです。ところが男性の場合、見た目で見ると処方をする、ということをとくときどき経験します。

さて一人目の患者さんは、38歳のお坊さんです。見た目は見事なメタボリック症候群で血色もよく、失礼ながら少し脂ぎった印象の、その方の主訴は「腰痛」でした。お坊さんですので朝夕のお勤めは欠かせないわけですが、底冷えのする本堂で、寒さを我慢しながらお経をあげていたら、耐えられないほど手足が冷たくなり、持病の腰痛がひどくなったといいます。この方の腹診所見がとても特徴的で、両方の臍径部に押すと非常に痛がるポイントがありました。この所見と主訴を合わせると、「当帰四逆加呉茱萸生姜湯」という処方にとどり着きます。数ある漢方薬のなかでも、とくに苦くて飲みにくい処方の1つなのですが、これがお坊さんの冷えの特効薬となりました。「手足の冷たさもずいぶん減ったけど、何より腰痛が軽くなったのがうれしい」という言葉を聞き、私にもちょっと御利益があるかしらと期待してしまっただけです。ただやはり、女性にお出しするときは圧倒的に「吹けば飛ぶような」体格の方が多く、なんとなく解せない気持は残りました。

二人目は45歳、とても多忙な会社員の方です。この方の主訴は「不眠」。睡眠導入剤に助けられて睡眠をとってはいるけれど、いつまでも服薬を続けたくはない、というご相談でした。見た目の体格は虚証寄り、診察してみると軽い胸脇苦満と腹部大動脈の拍動を認めます。足に触れてみると、指先が氷のように冷たい方でした。が、尋ねてみても「自分では冷えていると思わないけど…」とおっしゃいます。ここからの問診は漢方医の腕の見せ所。「年代的に、お仕事のストレス度が結構高いんでしょうね」と話をふると、堰を切ったように仕事に関する不平・不満が山盛りいっぱい語られました。さて、この方に私が処方したのが加味逍遥散です。この処方ではストレスを受けてイライラが昂じ、さまざまな症状をあらわしている方に適する処方、もちろん冷え性の治療にもよく用いられます。この方はインターネットで薬の効能をお調べになったらしく、「これ、女性の更年期障害の薬じゃないんですか？」といぶかしげな表情を浮かべていた時期もありました。が、約3か月の服薬でよく眠れるようになり、変にイライラすることも少なくなった、とその効果を報告して下さいました。この頃には足の冷えもずいぶん改善していたのですが、患者さんは相変わらず「そうですか？」とひと事のような反応でした。

三人目も同じく会社員の方で、35歳です。2人目の方と同様に、この方もハイ・ストレス状態に耐えていらっしやいましたが、違っていたのはイライラよりも気持ちの落ち込みが激しいという点でした。また「不眠」という主訴は共通していましたが、この方の場合「足が冷えて眠れない」とはつきりおっしゃっていたのが特徴的でした。この患者さんはとても典型的な虚証タイプ。底力のない脈やお腹で、腹部大動脈の拍動がかなりつよく触れました。この方に処方し、効果を表したのは「桂枝加竜骨牡蛎湯」です。「先生、これを

のむと足が温まってよく眠れます」ととても喜んでいただきました。さらに服薬を続けてしばらくすると、「いままで緊張したときに動悸を感じやすかったのが、ずいぶん軽くなりました」「心なしか、シャワーのときの抜け毛も減ったみたいです」と、初診時とはうってかわって饒舌になった患者さんが、直接口にはしていなかった症状の改善についても報告してくださいました。こんな形で、次々と多彩な効果が表れるのも漢方の魅力ですね。

さてこれまでご紹介した 3 人の患者さんたちは、いずれも中年とよばれる年代までの方でしたが、もう少し年を重ねると様子が違ってきます。手足の冷えというよりは全身の冷え感を自覚されていたり、下痢や腹痛を起こしやすかったりして、漢方薬のご相談にお見えになることが多いのです。こうした方々には、内臓を温める効果をもつ漢方薬が良い結果をもたらすものです。その例をご紹介します。

T さんは 70 歳の男性です。65 歳の時に胃がんと診断され、胃の 3 分の 2 を切除する手術を受けました。その後体重が 5kg ほど落ち、それに伴って体がとても冷えるようになったといいます。食欲はありますが、下痢をすることが多いため、消化の良いものを気をつけて摂っているとのこと。そのほかにめまいを起こしやすく、いつも足もとが心もとない感じで、階段の下りが怖いそうです。お腹は全体的に力がなく、心下部からお臍の脇までひろく腹部大動脈の拍動を触れました。また脈はとても触知しにくく、「沈・細」という所見でした。東洋医学では、体を支えるためのエネルギーを取り入れる場所として、消化管の機能をとっても重視します。この方は手術によって胃の容量が 3 分の 1 に減り、消化機能がそれまでよりも大きく落ちたところに、加齢現象などによる新陳代謝の低下が加わったのでしょう。さて、この患者さんには「真武湯」を処方しました。真武湯は身体の中の余分な水分をさばき、新陳代謝を高めて冷えを改善する働きをもつ処方です。服用を始めてしばらくすると、いつも付き添いで来院される奥様が、「最近、主人の顔色がとてもよくなったって、親戚の者から言われるんです。本人もそれを聞いて気を良くしているんですよ。以前は足もとがふわふわして怖いからって外出も嫌がっていたのに、最近は積極的に出歩くようになって」と嬉しそうに話して下さいました。

冷え症というのは身体が発する一つのサインですが、それを放置することで腰痛や不眠など、もっと具体的な自覚症状が悪化することがあります。また最後にご紹介した方のように、ご年齢や症状によっては、行動範囲すら狭めてしまう間接的な原因になることもあります。たかが冷えと侮らずに治療することが、意外な形で QOL の改善にも結びつく可能性があるわけです。日々ストレスと戦い、人工的な環境に囲まれて生活する中で、増えている「男性」の「冷え症」。ともすれば否定されてしまいがちなこの関係に、今後はもっとスポットライトが当たるといいですね。